

発災1か月後の大槌町



## ■全国から応援職員が集結

私たち関西に住む人々が経験した、阪神淡路大震災でも、市街地が大変な被害を受けましたが、地震の規模はM7.3でした。東日本大震災はそれを上回る規模の地震が発生した上に、大津波により、住宅以外に市役所や病院等の公共施設も数多く失われ、広範囲で壊滅的な被害を受けました。

このような状況の中で、被災地ではまちの再生に取り組まなければならないのですが、町の職員も多くの方が犠牲になりました。ま

た、三陸沿岸は小さな町が多く、そもそも職員数が少ないことや、これまで大規模なまちづくりの計画を作ったり、工事を行った経験が少なく、人手が足りないために、現在でも全国各地の市役所等から応援職員を募り、復興事業を進めています。

私が所属した都市整備課という部署は、当時職員の9割が応援職員で、北海道から沖縄まで、復興支援を志願した職員が集まっており、会議で議論が白熱すると、さまざまな方言が飛び交っていました。箕面市も、発災直後から継続して職員を派遣しており、現在も大槌町で3名の職員が被災地を支援しています。

## ■歴史を知り、まちを知る

私が大槌町に赴任して最初の仕事は、仮設住宅1軒1軒を訪問して、「今後どこに暮らしたいか」「住宅を再建する意向はあるのか」等の聞き取り調査を行いました。

まちづくりは、そこに暮らし生活していくために行うものであり、まず住民の方の思いを把握することが基本ですが、自宅や財産、家族を失い、不便な仮設住宅に住む方にしてみれば、方言も違う、顔も知らない職員が突然訪ねてきて、初めは戸惑われる方も多くいらっしゃいました。

しかし、訪問を重ねるうちに、被災前の大槌町の様子を語っていただけるようになりました。「今では隣の釜石市の方が大きいですが、江戸時代は代官所があり、三陸沿岸で一番歴史のある町だ。道路を作るなら沿岸一立派なものを作りたい」「湧水が豊富で、まちのあちこちに井戸があった。公園には井戸が必要」「大槌っ子は祭り好き」など、話出すと止まらないといった感じでした。特に日中は高齢の方と話す機会が多く、親しくなると2時間3時間は当たり前になりました。もし自分が逆の立場なら、こんなに箕面市のことを語れるかな？どれだけ箕面のことを理解しているかな？と考えさせられました。まちのことを知ることは、同時にまちへの愛着を深めることに繋がる。まちなみ会議の皆さんで取り組まれているパネル展やタウンウォッチングの重要性を遠く東北の地で改めて感じました。

発災直後の市街地の様子



### 高校生とのワークショップ



### ■復興の課題は日本全体の課題

時には地元高校生と復興まちづくりについて意見交換を行いました。若い世代が求めているのは「遊ぶ場所」「働く場所」が多く、就職先が無ければ、どれだけまちに愛着があっても、生活することが出来ないといった意見が多くありました。全国的に少子高齢化が課題となっていますが、特に東北沿岸では、復興事業に時間が掛かり、住宅再建を行う場所を求めて被災地以外に人口が流出していることも加わり、

近い将来、多くの市町村が消滅する危機に直面する人口減少が深刻な状況になっています。将来まちが復興しても、維持していくためには、町民が望んでも、過剰な整備は将来負担となるため避けることや、人口を増やすために、産業誘致が必要なことなど、課題は山積みでした。しかし、将来のまちを担う若者がこれからもこの大植に住み続けたいという想いや夢を持ってもらうためには、復興計画の策定は急務かつ必要不可欠でした。

### ■夢や希望がまちを創造する

復興計画を作る中で、特に沿岸の町で論点となったのが津波を防ぐための防潮堤の高さです。「津波の被害を防ぐには高い方が良い」「復興後の暮らしやまちなみ景観を考えると低い方が良い」と言う意見の相違です。人の数だけさまざまな意見があり、時には対立することもあります。100点満点ではなくても、お互いが納得する方向性、妥協点を見出すことが、まちづくりの本質であり、行政だけではなく、時には町民の皆さん同士で何度も話を重ねた結果、やっと復興計画が完成しました。

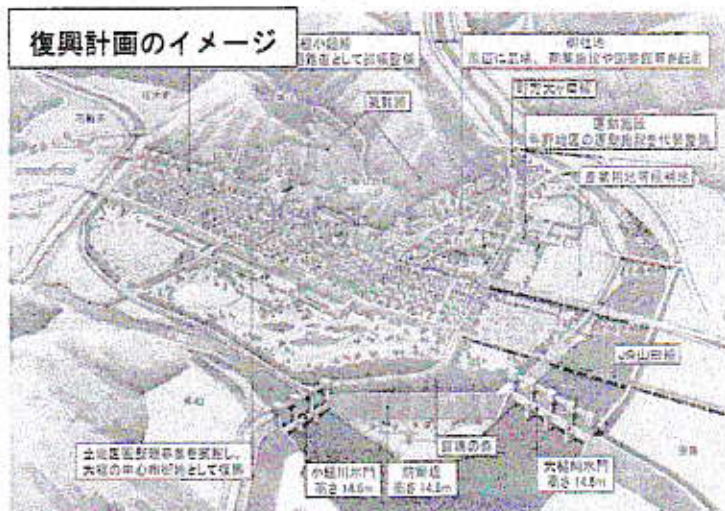
日々の暮らしだけでも大変な中、昼夜協議に参加いただいた被災者の皆さんの姿を見ると、私も「絶対素晴らしいまちに復興させてみせる」という強い思いが心に芽生えました。まちをつくるのは人であり、人を動かすのは熱い夢や未来への想いであることを痛感しました。

### ■私たちに出来ること

現在、被災地全域で、一斉に復興に向けた工事が始まったため、建築資材や、工事を請け負う業者が不足するなど、新たな課題が生じています。一方、被災地以外では、震災記憶の風化が進行していますが、被災地にはまだまだ支援が必要です。私も、何か身近なところから出来ることはないかと思い、買い物するときには、なるべく東北産の物を選んだり、被災地の募金活動があれば、財布と相談しながら、少しでも寄付しています。

被災地に思いを寄せることから支援は始まります。私の拙い文章で恐縮ですが、この記事きっかけに、少しでもご家族や周りの人と被災地のことをお話いただければ幸いです。また、お住まいのまちに興味を向けてみませんか。きっと新しい発見があり、まちへの愛着が深まると思います。まちづくりの主人公は、他でもない、そこに暮らす皆さん自身です。

### 復興計画のイメージ



緑の芝生に覆われた運動場に(みどりの景観は良いが、芝生の手入れに多大の労力と徒競走などに支障)櫛形に並んだ校舎で705名(27学級)の児童が学んでいます。

『ともに学び 輝く子』を目標に、励まし合い、支え合い、学び合う子ども。感謝と思いやりの心をもつ子ども。進んで学び、自ら求め続ける子ども。豊かな表現ができる子どもを目指しています。校門脇には「おはよう」「ありがとう」「げんはなあいさつ あかるい学校」の標語が児童に象徴的に呼びかけています。

校区は旧くから在る西国街道の半町、瀬川本陣に続く街並みが発展し、阪急線、国道171号線の開通を経て、農地や南山に住宅が続々と建って拡大した。



これら街の歴史や様子を、1年生の「校区の公園を訪ねる」2年生「まち探検」(自分や友達の住む街を知る)3年生「校区探検」(お店調べ、昆虫館、郷土資料館見学など)4年生「優しい街づくりを考えよう」(市内や校区の福祉施設を調べたり体験)5年生「環境学習」(箕面市に特化せず)6年生「地域へ飛び出そう(地域の歴史)(地域の大人と出会う)」まで各学年ごとに、環境、街並み、機能などを、近隣から箕面市全体などへ順次拡げて学んでいます。



この学校の特徴に、卒業生の多くが地域に住み、保護者として学校に協力しています。また青少年健全育成に関わる地域の団体が、教職員も巻き込んで、西南ジャンボリー、みんなおいでよ運動会、凧揚げ大会、ホリデーキッズ(校庭で栽培した野菜などのクッキングや手芸)、昔遊び(地域の方に教えてもらう)を催し、地域と学校が連携して伝統的に子どもの育成に取り組んでいることです。(先般、活動の成果が認められ箕面市より表彰)

取材当日(2月19日)肌寒い校庭で、運動着と半パンツの子供たちが元気に縄跳びをしていたことが強く印象に残りました。(奥田勝久校長先生のお話より)

## 災害に強い安全な街づくりが進んでいます

昨年度末、消費税UPの駆け込み需要で住宅建設が各地で盛んに行われ、4月以降は建築件数が極端に落ちると云われていました。しかし、箕面市内の各所で、予想に反してどんどん住宅が建設され、アベノミックスの反動など、何処の世界の話かと思うぐらいです。

北摂の山々が身近で、市長はじめ担当部署、市議会が長年かけて諸施策を勧め、市民・各種団体も懸命にサポートして来ました。今年も市長は「もみじだより」で「安心・支えあい最優先」「子育てしやすさ日本一」「緑・住みやすさ最優先」を掲げ、市政運営を推進すると述べておられます。その成果が近年みのり、3年連続で「住みよさランキング」大阪1位に選ばれています。加えて北大阪急行線の延伸、新名神の工事も着実に進捗し、ますます交通の便も良くなり、市制施行後の懸案だった、東西交通分断の悩みも解消の兆しが見えてきました。

### 各所に残る細道

箕面市は純農村地域として、発展した歴史があります。旧くからの集落では、すれ違うのもやつの狭隘な道が沢山あります。往時は鋤クワで田畑を耕し、少しでも多くの田畑を確保、近隣・親類縁者の絆を高めるのに有効な方法で、現代でも街の歴史や佇まいを知る上で貴重な文化遺産とも考えられます。しかし、車社会や農機具の機械化が進むと、細道は通行が出来ず、不便なばかりか、一旦火災や災害が発生しますと、消防車や救急車、その他の緊急作業車両が現場に入らず被害が拡大する恐れが高いのです。



これらの危険箇所を改良するには、国や市の関係部署は一般の市民に見えない処で、いろいろな手段で努力を続けておられます。例えば細道に面した住居を改築する際は、建築基準法により道路の拡幅を要



請し、建物や塀・生垣を後退(セットバック)させたり、田畑など農地を住宅地にする場合なども、道路幅を確保しなければ建築許可を出さない等厳しく対応しています。(車社会の現代では、自宅に車が置けない住宅は売れない傾向が強い)勿論新規開発の住宅地へのアクセス道路も同様に拡幅が迫られます。かくして徐々に街並みが姿を変えつつあり、しばしば驚かされる場面が多くなりました。

一口に道路拡幅と言っても、容易なことではありません。自分の土地を道路に提供する訳ですから、私有財産が減少することになります(一方で評価は判然としませんが、資産価値が上がる)。多くは先祖伝来の土地の為、自分の代で減少させるのは忍びないとの思いが強く働きます。この為解体して新築することを諦め、小規模な改築に留めるケースも見られます。旧集落に虫籠窓や茅葺の古民家が多く残って